# 勝坂遺跡の縄文十器種実圧痕にみる植物利用

中川 真人・相模原縄文研究会 山本 華\*・佐々木 由香\*・バンダリ スダルシャン\* (\*パレオ・ラボ)

### はじめに

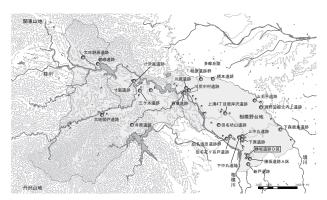
縄文時代の植物利用を探るアプローチの一つとして、 縄文土器に観察される植物種実圧痕の同定がある。近年、 研究の進展が目覚ましく、相模原市内においても中山・ 佐野(2015)による勝坂遺跡、山王平遺跡、田名塩田遺 跡群での圧痕調査を皮切りに、国指定史跡川尻石器時代 遺跡の土器圧痕の分析報告(米田ほか2017)や、中山・ 中川ほか(2018)による下原遺跡の圧痕調査があり、調 査成果の蓄積が進んでいる。一方で、これらは多量の種 実圧痕が混入した土器や、出土数の少ない晩期終末の土 器など、選択的に特異な資料に偏重している。

そこで本研究では、縄文中期集落から出土する土器全体での圧痕土器の傾向を確認して基礎的なデータの蓄積を図るため、勝坂遺跡第1次調査出土土器の悉皆的な圧痕調査を行い、種実圧痕からみた勝坂遺跡の植物利用を検討することを目的としている。なお、全点調査における圧痕土器の選別から圧痕レプリカの作成までは、博物館考古ボランティアである相模原縄文研究会との市民協働調査によるものである。 (中川)

### 1. 勝坂遺跡の概要

勝坂遺跡は神奈川県相模原市南区磯部に所在する(第1図)。鳩川左岸の相模野台地に立地し、縄文時代中期を指標する勝坂式土器の標式遺跡であり、関東を代表する中期集落址として国史跡に指定されている。大正15年に発掘調査した大山柏氏によって、「原始農耕」が提唱されたことでも学史的に重要な遺跡であり(大山1927)、勝坂遺跡を対象とした今回の分析の意義もそこにある。

勝坂遺跡の調査は、国史跡の経緯となった 1973 年のトレンチ調査を第1次調査とし、以後今日までに 111 次に及ぶ調査が行われている(河本・齊藤 2018)。勝坂遺跡は「勝坂川」(現在は暗渠)の谷を挟んで東の勝坂遺跡 A 区と西の勝坂遺跡 D 区に大きく分かれる(第2図)。集落址はそれぞれ確認されており、A 区は中期中葉~後葉、D 区は北と南に中期後葉~末葉の集落址が展開しており、南集落には後期前葉~中葉の敷石住居址も検出されている。D 区北側の E 区には、中期中葉~後葉の磯部



第1図 相模原市内縄文集落分布と勝坂遺跡位置図

山谷遺跡が分布する。D区西側には鳩川が南流し、その対岸には中期中葉の磯部宮際遺跡が分布する。勝坂遺跡周辺は湧水環境を背景とした有数の中期集落址群を形成しており、D区下段の鳩川低地である有鹿谷の調査では、花粉分析の成果等により低地微高地周辺でのクリの管理栽培も想定されている(中川2015)。 (中川)

# 2. 勝坂遺跡第1次調査出土土器の圧痕調査

圧痕調査の対象とした勝坂遺跡第1次調査の出土土器は、1 m幅のトレンチ 42 本から出土したものである(大川・大島 1975)。この内、既に中山・佐野(2015)により、ツルマメ種子が多量に混入した連弧文土器(第2図)のほか、長さ9.5mm×幅5.3mm×厚さ3.4mmのダイズ種子の圧痕が確認されている。

今回の全点調査では、土器総数 10,302 点、総重量で約 400kg が集計され、まずは肉眼による圧痕の選別を行った(表 1)。一次選別した圧痕土器は 135 点となり、そこからシリコンで作製した圧痕レプリカは 143 点である。その後、顕微鏡観察により土器 46 点から種実圧痕が54点、骨?圧痕が1点であった(詳細は後述)。時期別では、中期中葉~後期前葉にかけて確認され、集落の形成期を反映して中期後葉が最も多かった。

表 1 種実圧痕土器数量・重量

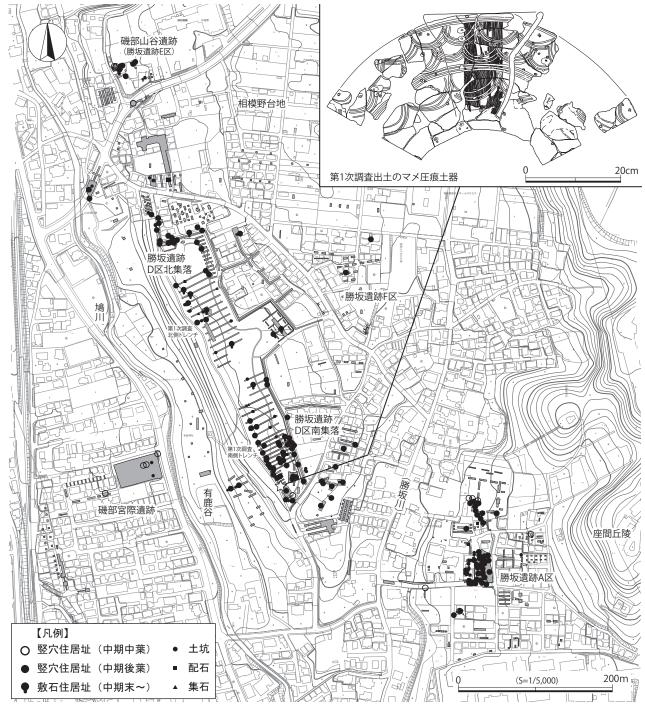
出土	土器	種実圧	割合		
総数量	10, 302	数量	46	0.45%	
総重量(g)	400, 785	重量(g)	1, 735	0.43%	

出土土器全体に占める種実圧痕土器の数は 0.45%、重量でも 0.43%であることから、概ね 220 点前後の土器に

圧痕土器 1 点が含まれる程度となることが確認された。 中期集落址で定量分析した周辺事例と比較すると、東京

表 2 時期別種実圧痕土器数量・重量・圧痕数

	中期中葉		中期後葉			中期末葉			後期初頭			後期前葉		
数量	重量	圧痕数	数量	重量	圧痕数	数量	重量	圧痕数	数量	重量	圧痕数	数量	重量	圧痕数
3	204. 4	6	37	1336.8	43	3	138. 7	3	2	35.8	2	1	19. 6	1



第2図 勝坂遺跡遺構分布図及びマメ圧痕土器 (河本ほか 2018 を一部改変)

都多摩ニュータウン遺跡群で圧痕土器 50 点/観察土器 7,255 点、種実圧痕率 0.68% (大網ほか 2018)、東京都下野谷遺跡で圧痕土器 65 点/観察土器 11,509 点、種実圧痕率 0.21% (山本ほか 2017) であることから、相模原縄文研究会による選別作業の観察眼の精度は、不確実性はあったとしても、結果として遜色なく高かったと思われる。

選別した圧痕土器の表面は、実体顕微鏡(10倍)で写真撮影を行い、科以上の植物種実として同定された土器については図版1に示した。 (中川)

### 3. 試料と方法

圧痕レプリカ試料は、あらかじめ相模原市立博物館によって135点の土器から作製された圧痕のレプリカ143点である。レプリカの作製は、丑野・田川(1991)等を参考に、以下の手順で行われた。まず圧痕内を水で洗い、パラロイドB72の5%アセトン溶液を離型剤として圧痕内および周囲に塗布した後、印象剤としてシリコン樹脂(JMシリコンインジェクションタイプ)を圧痕部分に充填した。レプリカ作製後、圧痕内及び周辺の離型剤をアセトンで除去した。

同定は、最初に実体顕微鏡下でレプリカを観察し、同定できる可能性があると判断した試料のなかから主要な分類群や詳細な観察が必要な試料を抽出し、走査型電子顕微鏡(KEYENCE 社製 超深度マルチアングルレンズ VHX-D500/D510)で観察と計測および写真撮影を行った(図版 2~4)。最終的な同定は、走査型電子顕微鏡写真を参考に、レプリカを実体顕微鏡下で再度観察して行った。土器及び圧痕のレプリカは、相模原市立博物館に保管されている。 (山本ほか)

### 4. 結果

135点の土器から作製された 143点のレプリカのうち、46点の土器から作製された 55点のレプリカが何らかの圧痕と同定された。内訳は、木本植物がブドウ科種子とクマヤナギ属近似種核、クリ子葉、サンショウ属?果実?、ミズキ核、クマノミズキ核の6分類群と、草本植物がダイズ属種子・子葉(?含む)とササゲ属アズキ亜属種子、マメ科種子・子葉、アカメガシワ種子、シソ属果実の5分類群の、計11分類群であった。ブドウ科には木本と草本があるが、ここでは便宜的に木本植物に含めた。ほかに、草本植物の不明鱗茎?と不明の骨?が得られた。また、詳細な同定が困難な種実圧痕を不明  $A \sim I$  にタイプ分けした(表 3)。

産出数は、ダイズ属(?含む)が13点で最も多く、不

明 A(?含む)が 10 点、シソ属が 6 点、不明 E(?含む)が 4 点、ミズキとササゲ属アズキ亜属、マメ科、不明 C が各 2 点、ブドウ科とクマヤナギ属近似種、クリ、サンショウ属?、クマノミズキ、アカメガシワ、不明 B、不明 D、不明 F、不明 G、不明 H、不明 I、不明鱗茎?、不明の骨?が各 1 点であった(表 4)。

以下、土器の時期別に整理する。

縄文時代中期中葉:シソ属果実が4点とダイズ属種子と子葉が各1点確認された。

縄文時代中期末葉:ダイズ属子葉?と不明 A 種実、不明 G 種実?が1点ずつ確認された。

縄文時代後期初頭:アカメガシワ種子と不明の骨?が1 点ずつ確認された。

縄文時代後期前葉:不明Ⅰ種実?が1点確認された。

以下では、種実及び不明鱗茎?の圧痕について分類群ごとに記載を行い、同定の根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田(2003-)に準拠し、APG Ⅲリストの順とした。

(1) ブドウ科 Vitaceae sp. 種子

上面観は楕円形、側面観は基部が尖る広倒卵形。腹面 には縦方向に狭卵形の溝が2本ある。表面は平滑。

(2) クマヤナギ属近似種 cf.*Berchemia* sp. 核 クロウメモドキ科

上面観は両凸レンズ形、背・腹面観は卵形。背・腹面の中央に一本の縦溝が入る。背・腹面の境界は稜をなす。側面観は狭卵形。形状や特徴はクマヤナギ属に似るが、臍が残っていないため、近似種とした。

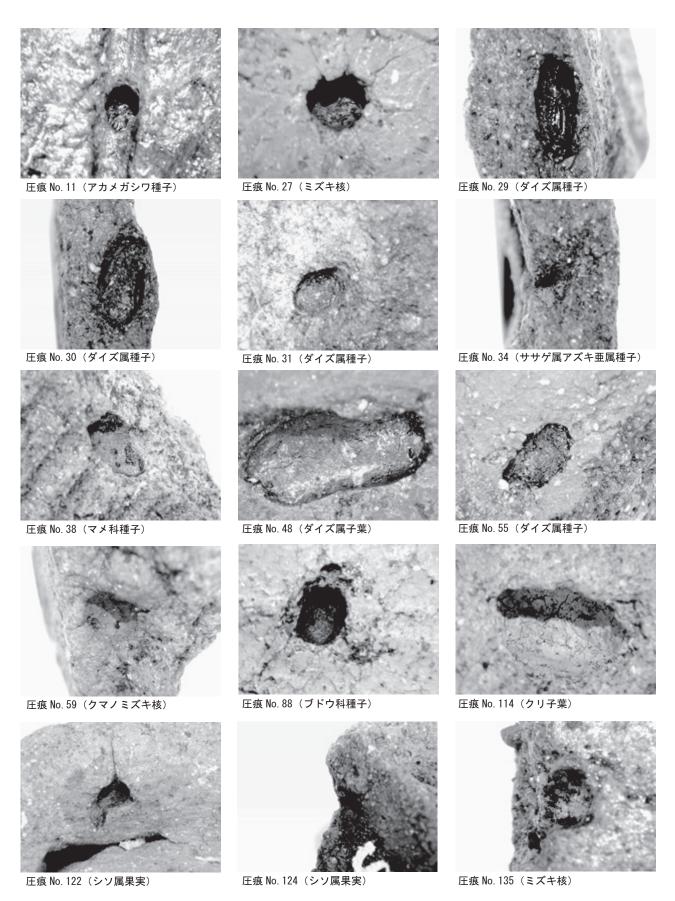
(3) クリ *Castanea crenata* Siebold et Zucc. 子葉 ブナ科

完形ならば上面観は楕円形、側面観は広卵形。尖った 頂部から扇形に広がる。表面に縦方向の皺状の深い溝が ある。

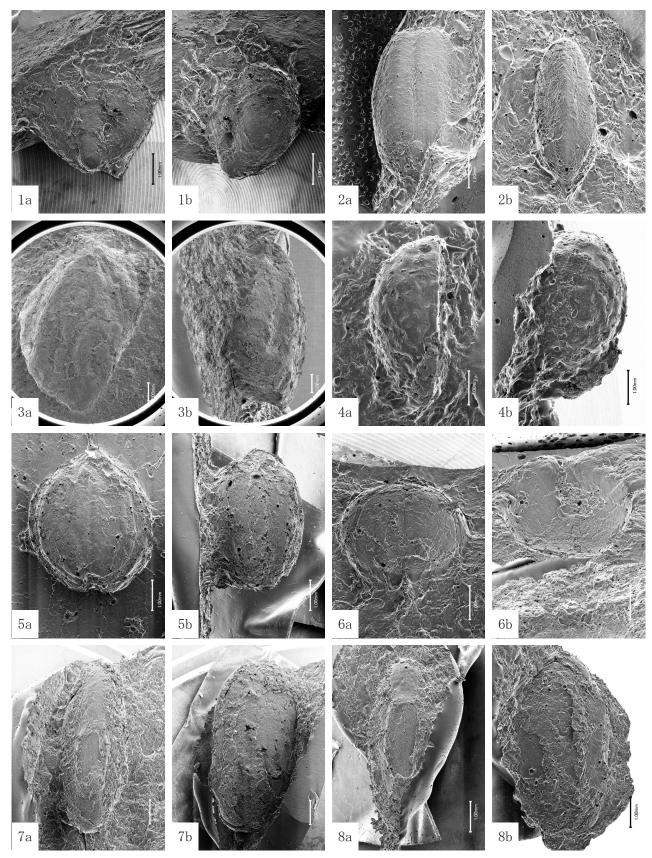
(4) サンショウ属? Zanthoxylum sp.? 果実? ミカン科

1/2 が残存している。完形ならば上面観は楕円形、側面観は倒卵形。表面には凹凸がある。

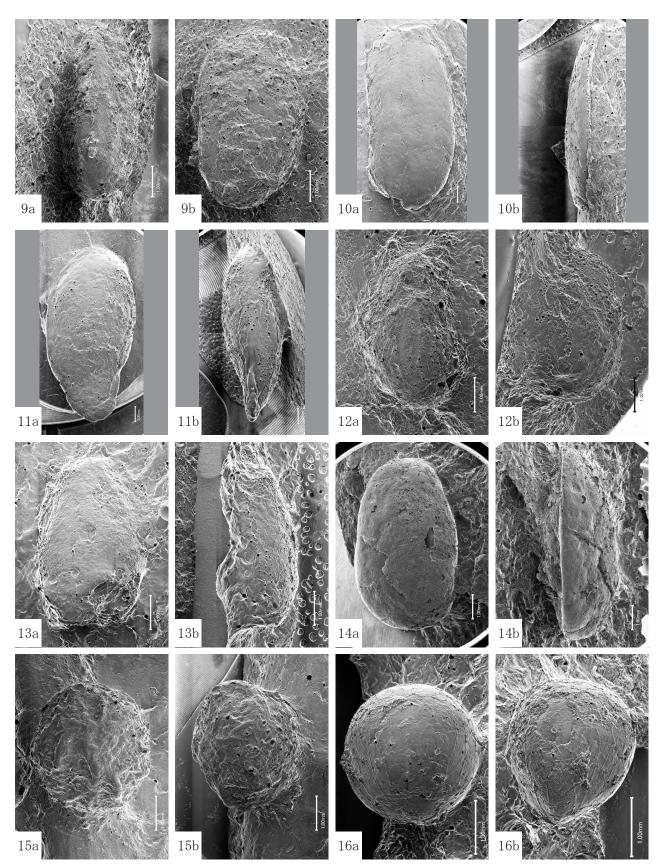
(5) ミズキ Cornus controversa Hemsl. ex Prain 核



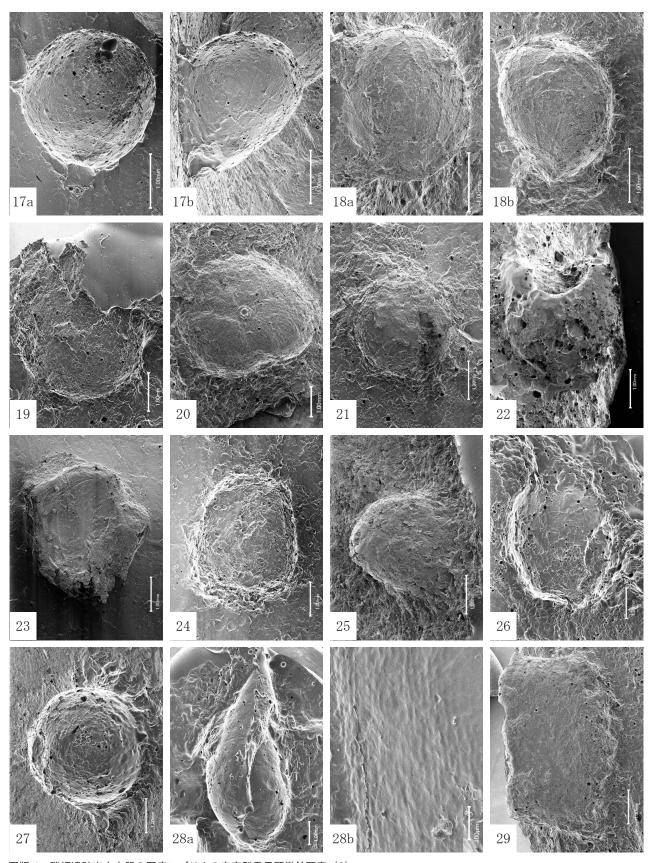
図版 1 種実圧痕土器の圧痕部実体顕微鏡写真(×10)



図版 2 勝坂遺跡出土土器の圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真 (1) 1. ブドウ科種子 (No.88)、2. クマヤナギ属近似種核 (No.57)、3. クリ子葉 (No.114)、4. サンショウ属?果実? (No.101)、5. ミズキ核 (No.27)、6. クマノミズキ核 (No.59)、7. ダイズ属種子 (No.29)、8. ダイズ属種子 (No.30-1)



図版 3 勝坂遺跡出土土器の圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真 (2) 9. ダイズ属種子 (No.30-3)、10. ダイズ属子葉 (No.48)、11. ダイズ属子葉? (No.82)、12. ササゲ属アズキ亜属種子 (No.2-1)、13. マメ科種子 (No.38)、14. マメ科子葉 (No.98)、15. アカメガシワ種子 (No.11)、16. シソ属果実 (No.1-2)



図版 4 勝坂遺跡出土土器の圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真(3) 17. シソ属果実(No.1-3)、18. シソ属果実(No.122)、19. 不明 A 種実(No.2-2)、20. 不明 B 種実(No.5)、21. 不明 C 種実(No.6)、22. 不明 D 種実(No.10)、23. 不明 E 種実(No.15)、24. 不明 F 種実?(No.18)、25. 不明 G 種実?(No.111)、26. 不明 H 種実?(No.130)、27. 不明 I 種実?(No.132)、28. 不明鱗茎?(No.129)、29. 不明骨?(No.118)

圧痕 番号	時期 (縄文時代)	土器型式	重量	圧痕部位	付着面	同定結果	÷17 (.1.	長さ	幅 (短軸)	厚さ	臍長	臍幅	簡易楕円体
	中期中葉	勝坂3	(g)	口縁部	断面	分類群 シソ属	部位 果実	(長軸)	2.47	(2.05)	_	-	体積
	中期中葉	勝坂3		口縁部	断面	シソ属	果実	2. 66	2. 47	2. 15	_	_	_
	中期中葉	勝坂3		口縁部	外面	シソ属	果実	2. 57	2. 49	2. 18	_	_	_
	中期中葉	勝坂3		口縁部	外面	シソ属	果実	2. 49	2. 49	2. 10	_	_	_
	中期後葉	勝火る		隆線	外面	ササゲ属アズキ亜属	種子	4. 67	(2. 58)	(2. 80)	1.76	0.60	17. 66
	中期後葉			隆線	外面	不明A	種実	(3, 90)	3, 38	(2. 59)	-	-	-
	中期後葉	連弧文	14. 4		断面	不明B	種実	(3, 30)	4. 44	3. 89	_	_	_
	中期後葉	加曽利E3	26. 8		外面	不明C	種実	2. 76	2. 54	-	_	_	_
	中期後葉	加目利氏		頸部	断面	不明D	種実	3. 44	3. 13	2. 16	_	_	_
	後期初頭	称名寺 I		口縁部	外面	アカメガシワ	種子	3. 44	3, 50	3. 17	_	_	_
	中期後葉	你有寸1		頸部	内面	不明E	種実	(4. 21)	(3. 48)	1. 48	_		
	中期後葉	加曽利E2~3	20. 3		内面	不明F	種実?	3, 45	2. 90	- 1. 40	_	_	_
	中期後葉	連弧文		胴部	外面	ダイズ属	種子:	4. 47	2. 30	(1. 84)	_	_	9. 90
	中期後葉	連弧文		胴部	内面	ダイズ属?	種子	4. 47	3. 22	(2. 33)	_	_	9.90
	中期後葉	連弧文		胴部	内面	ダイズ属?	種子	4. 42	2. 91	2. 24	_	_	_
	中期後葉	連弧文	28. 5		断面	ダイズ属?	種子	(4. 12)	2. 91	2. 31	_	_	_
	中期後葉	加曽利E2	11. 3		断面	不明A	種実	6. 82	(3, 90)	2. 35	_	_	_
	中期後葉	かり 目 不りE-2		口唇部	口唇	不明A	種実	4. 41	3. 24	1. 78	_	_	_
	中期後葉			口唇部	口唇	不明A	種実	4. 41	3. 14	2. 76	_	_	_
	中期後葉	加曽利E3 (新)	155. 2		内面	ミズキ	核	4. 73	4. 12	2. 70	_	_	_
	中期後葉	連弧文		胴部	外面	ダイズ属	種子	7. 24	(3, 91)	2. 89	2. 25	0.72	42.84
	中期後葉	連弧文		胴部	断面	ダイズ属	種子	6. 15	(3. 16)	(2. 17)	2. 49	0.72	22. 08
	中期後葉	連弧文		胴部	外面	ダイズ属	種子	4, 49	2. 92	(2. 33)	2.49	0.93	15. 99
		連弧文	7.1			ダイズ属			3. 50				27. 71
	中期後葉中期後葉	連弧文Ⅲ		胴部 胴部	内面 内面	ダイズ属	種子種子	5. 75 (4. 02)	3. 22	2. 63	1.86	0.47	13. 96
		連弧乂Ⅲ 曽利Ⅲ~Ⅳ				タイ A 偶 不明C				(2.06)	1.15	0.64	13.96
	中期後葉	賣利Ⅲ~Ⅳ 連弧文	3. 1	胴部	断面	ササゲ属アズキ亜属	種実種子	2. 87	(1. 94)	(2. 17)	1.56	0.58	
	中期後葉			胴部	断面			(3. 83) 4. 95	2. 91				25. 33
	中期後葉	連弧文 曽利Ⅲ~Ⅳ	19.8		外面	マメ科 不明A	種子 種実?		3. 21	(1.80)	1.76	0.38	_
	中期後葉			胴部	断面			3.96	2. 94		_	_	
	中期後葉	無文	28. 1		断面	ダイズ属	種子	8. 91	5. 28	(2.72)	_	_	67. 00
	中期中葉	無文		口縁部	内面	ダイズ属	子葉 種実?	11. 87	5. 44	(1. 67)	_	_	_
	中期後葉			胴部	断面 (四位)	不明E		(4. 54)	3. 36	2.04	_	_	_
	中期後葉中期中葉	曽利Ⅲ	78. 4		外面(隆線)	不明A ダイズ属	種実?	5. 29	3. 63	(1.88)			
	1 //* 1 //*	勝坂2	111.9		内面	クマヤナギ属近似種	種子	5. 80	2. 91	1. 44	1.94	0.68	12.73
	中期後葉	無文	52.6		断面		核	5. 11	2. 88	2.06	_	_	_
	中期後葉	曽利Ⅲ~Ⅳ	15. 8		外面	不明E	種実	(6. 05)	(3. 68)	1.06	_	_	_
	中期後葉	加曽利E3	18.6		断面	クマノミズキ	核	(2. 97)	3. 83	(2.85)	-	_	_
	中期後葉	加曽利E2		胴部	外面	不明A	種実 ス 茶 の	5. 87	3. 88	3. 28	_	_	_
	中期末	曽利 V	78. 3		内面	ダイズ属 ブドウ科	子葉?	11. 75 (3. 79)	6.06	4. 05 2. 93	-	_	_
	中期後葉	加曽利E3 曽利V	131.7		内面		種子		3. 93		-	_	
	中期末	省个J V	44. 3		内面	不明A	種実	6. 56 7. 17	3. 66 4. 25	(1. 38)	-	_	-
	中期後葉	台 ≰川東7	29. 7		断面	マメ科	子葉			(2. 35)			
	中期後葉	曽利IV		胴部	断面	サンショウ属?	果実?	5. 08	2. 72	(2. 08)	_	-	-
	中期後葉	加曽利E3	80.7		内面	不明A	種実	5. 10	3. 19	(1.81)			
	中期末	曽利V		胴部	断面	不明G	種実?	(2.70)	2. 50	2.63	-	-	-
	中期後葉	hn èi £ilro	16.8		内面	クリ	子葉	(9. 92)	(7. 16)	(4. 16)	_	_	_
	中期後葉	加曽利E2	96. 7		内面	不明A 不明	種実	4. 82	3. 51	(2.48)	-	_	_
	中期後葉	曽利Ⅱ		胴部	外面	1.74	骨?	(3. 20)	5. 02	2. 33	_	_	_
	中期後葉	曽利 加東利E9	21.7		外面	シソ属	果実	2. 67	2. 21	2. 15	-	-	_
	中期後葉	加曽利E2		口縁部	内面	シソ属	果実	2. 87	(2. 59)	2. 14	-	_	-
	中期後葉	4- b + T		口縁部	内面	不明E	種実?	(4. 34)	(3. 69)		-	_	-
	後期初頭	称名寺 [		胴部	断面	不明	鱗茎?	8. 61	3. 74	(4. 18)	-	_	
	中期後葉	曽利Ⅲ~Ⅳ	21. 2		内面	不明H	種実?	(3. 85)	3. 47	3. 11			-
	後期前葉	無文	19.6		外面	不明Ⅰ	種実?	2.76	3. 65	3. 36	-	-	_
	中期後葉	無文 ・ 種子のおよそ半	12. 4		外面	ミズキ	核	(3.59)	4. 18	3. 56	-	_	-

No. 34の簡易楕円体体積は、種子のおよそ半分が残存しているとみなし、大きさを復元した値

### ミズキ科

上面観は楕円形、側面観は卵形。表面にはやや流れるような縦方向の深い溝と隆起があり、基部は大きく窪む。 (6) クマノミズキ Cornus macrophylla Wall. 核 ミズキ科

球体で、縦方向にほぼ等間隔の浅い溝が入る。

(7) ダイズ属・ダイズ属? Glycine spp./ Glycine spp.? 種子・子葉・子葉? マメ科

種子は、扁平な楕円体。狭楕円形の臍の中央には一筋 の溝が縦方向に入る。中山・佐野(2015)によると、ツ ルマメと極小粒の栽培ダイズの種子表面には蜂の巣状の 膜状組織が見られる。臍がなくとも膜状組織に似た構造 が見られた場合、その一群をダイズ属?とした。子葉は半割状で、縦方向に長い。表面は平滑。2枚の子葉がずれているかのような変形した形態の試料を子葉?とした。(8) ササゲ属アズキ亜属 Vigna subgenus Ceratotropis spp. 種子 マメ科

丸みを帯びた三角柱から円柱形にちかい楕円体。狭楕 円形の臍に縦溝は見えない。

(9) マメ科 Fabaceae spp. 種子・子葉 マメ科 種子は、扁平な楕円体。臍が不明瞭な一群を、マメ科 とした。表面は平滑。子葉は半割状。

(10) アカメガシワ Mallotus japonicus (L.f.) Müll.Arg. 種子 トウダイグサ科 やや扁平な球体。Y字形の小さな着点があり、表面に は不規則な隆線状突起が密生する。

### (11) シソ属 Perilla spp. 果実 シソ科

上面観は円形から広倒卵形、側面観は着点に向かって徐々に細くなる倒卵形。着点は円形で大きい。表面を多角形の網目状隆線が覆う。計測した6点の大きさは、長さ2.16-2.87mm、幅2.21-2.59mm、厚さ2.00-2.18mm(いずれも残存値を含む)。松谷(1984)では長さ2.00mm以上がエゴマとされており、今回のシソ属はすべてエゴマ程度の大きさであった。

# (12) 不明 A Unknown A 種実·種実?

扁平な楕円体で、着点は残存しない。表面が粗く、構造が不明瞭。マメ科種子に似るが、礫の可能性も否定できない一群を不明 A とした。

### (13) 不明 B Unknown B 種実

球体で、中央の臍状の小さな穴から三本の溝が放射状 に伸びる。3分果の果実か。

### (14) 不明 C Unknown C 種実

いびつな球体で、形はシソ属に似るが、表面の状態が 悪い。

### (15) 不明 D Unknown D 種実

# (16) 不明 E Unknown E 種実·種実?

不定形な破片状の形態で、オーバーハングする。堅果の果実や子葉の可能性がある一群を不明 E とした。

# (17) 不明 F Unknown F 種実?

完形ならば楕円体か。長軸方向の片側が鈍稜になって いるようにも見えるが、表面が粗く構造は不明瞭。炭化 物が付着している点とオーバーハングしている点から、 有機物と判断される。

# (18) 不明 G Unknown G 種実?

完形ならば卵形か。頂部がやや尖る。表面は平滑で、 礫の可能性もある。

### (19) 不明 H Unknown H 種実?

完形ならば楕円体か。圧痕として残っている一端に円 形の窪みがあり、そこから反対方向へ隆起と溝が畝状に 伸びる。

# (20) 不明 I Unknown I 種実?

ややつぶれた球体で、丸い窪みが一つある以外に特徴 的な構造はない。

### (21) 不明 Unknown 鱗茎?

狭卵体で、先端が尖る。鱗片が一部剥がれている状態か。 表面に表皮細胞状の構造が見られるが、不明瞭。

表 4 勝坂遺跡出土土器の圧痕組成

分類群	部位	縄	文時代中	期	縄文時	総計	
JJ 79(4+		中葉	後葉	末葉	初頭	前葉	NACY D. I.
ブドウ科	種子		1				1
クマヤナギ属近似種	核		1				1
クリ	子葉		1				1
サンショウ属?	果実?		1				1
ミズキ	核		2				2
クマノミズキ	核		1				1
ダイズ属	種子	1	7				8
	子葉	1					1
	子葉?			1			1
ダイズ属?	種子		3				3
ササゲ属アズキ亜属	種子		2				2
マメ科	種子		1				1
	子葉		1				1
アカメガシワ	種子				1		1
シソ属	果実	4	2				6
不明A	種実		7	1			8
	種実?		2				2
不明B	種実		1				1
不明C	種実		2				2
不明D	種実		1				1
不明E	種実		2				2
	種実?		2				2
不明F	種実?		1				1
不明G	種実?			1			1
不明H	種実?		1				1
不明I	種実?					1	1
不明	鱗茎?		1				1
不明	骨?				1		1
合計		6	43	3	2	1	55

(山本ほか)

### 5. 考察

主に縄文時代中期中葉から後期前葉の土器に確認された圧痕のレプリカを同定した結果、143点のうち55点は同定可能と判断された。55点中53点が種実圧痕、1点が不明鱗茎?で、1点が不明骨であった。種実圧痕と同定された53点のうち、31点は科以上の詳細な同定が可能であった。同定された種実の中には、ブドウ科やクリ、サンショウ属?、ミズキ、ダイズ属、ササゲ属アズキ亜属、マメ科、シソ属といった、食用などとして利用可能な種実が多かった。アカメガシワは落葉の木本、クマヤナギ属は落葉ツル性木本で、種実は食用にならないため、偶発的に粘土に入った可能性がある。

那須ほか (2015) は、現生の野生種のツルマメ及び栽培種のダイズの種子を乾燥・吸水・炭化・未成熟の状態で計測して、簡易楕円体体積を比較し、状態の違いを考慮したうえで 40mm³以下を現在の野生型、70mm³以上を現在の栽培型、40~70mm³の間は栽培種と野生種の中間型とみなしている。今回確認されたダイズ属種子の圧痕(ダイズ属?種子とダイズ属子葉・子葉?は除く)のうち、縄文時代中期中葉の No.55 の簡易楕円体体積は12.73mm³で、野生型と推定される。また、縄文時代中期後葉の No.19、No.29、No.30-1、No.30-2、No.30-3、No.31、No.47の簡易楕円体体積は、それぞれ9.90mm³、42.84mm³、22.08mm³、15.99mm³、27.71mm³、13.96mm³、67.00mm³であり、No.19と No.30-2、No.30-3、No.31 は野生型、No.29

と No.47 は中間型と推定される。さらに那須ほか(2015)は、現生のヤブツルアズキとアズキの種子を同様に比較して、簡易楕円体体積が  $30 \text{mm}^3$  以下は野生型、 $60 \sim 70 \text{mm}^3$  以上は栽培型、その中間の大きさの種子は栽培種と野生種の中間型とみなしている。縄文時代中期後葉のNo.2-1 と No.34 のササゲ属アズキ亜属種子の簡易楕円体体積は、それぞれ  $17.66 \text{mm}^3$  と  $25.33 \text{mm}^3$ (およそ半分が残存しているとみなして大きさを復元)で、いずれも野生型と推定される。

今回検出されたミズキやダイズ属、ササゲ属アズキ亜属、シソ属は、縄文時代前期の埼玉県犬塚遺跡(山本ほか 2018)や、縄文時代中期の埼玉県中井遺跡(上野・佐々木 2018)、東京都下野谷遺跡(山本ほか 2017)、多摩ニュータウン遺跡群(大網ほか 2018)でも確認されており、関東地方の各遺跡でしばしば共通する組成と考えられている。

勝坂遺跡では、これまでに縄文時代中期後葉の土器一個体から大量のツルマメ種子圧痕が検出されている(中山・佐野 2015)。また、同じ相模原市内の下原遺跡では、縄文時代中期中葉の土器一個体から大量のシソ属果実の圧痕が検出されている(中山ほか 2018)。相模原市内の圧痕検出事例が近年増えつつあるなかで、今回は利用可能な種実を主体に、一種類に偏らない多様な種実圧痕が確認された。(山本ほか)

### おわりに

勝坂遺跡を初めて発掘調査し、その報告書で「原始農耕」について言及した大山(1927)は、「必ずしも器具をもって土地を耕すことのみでなく、もっと消極的な、有用植物の保護、すなわちこれが繁茂を計るということも考えねばならない」とし、今日的な植物の管理栽培の考え方を既に示している。まずは、この有用植物の利用を具体に示し、集落形成の変遷や、相模野台地、多摩丘陵、津久井山間部など集落分布とも比較検討できるよう、今後も悉皆的な種実圧痕分析が求められる。 (中川)

# 謝辞

佐野 隆氏、中山誠二氏には相模原縄文研究会に圧痕 調査の重要性と技術的なご指導を賜りました。末筆では ありますが、記して感謝申し上げます。

### (引用参考文献)

河本雅人·齊藤真一(2018) 国指定史跡勝坂遺跡総括報告書,相模原市教育委員会.

松谷暁子(1984) 走査電顕像による炭化種実の識別. 古

文化財編集委員会編「古文化財の自然科学的研究」: 630-637、同朋舎出版.

- 中川真人(2015) 勝坂遺跡有鹿谷地点の植物利用と地考 古学的解釈. 勝坂遺跡有鹿谷地点 - 第85・89・102・ 105・106 次発掘調査報告書 - , 202-211, 相模原市教 育委員会
- 中山誠二・佐野 隆(2015)ツルマメを混入した縄文土 器一相模原市勝坂遺跡等の種子圧痕一. 山梨県立博物館研究紀要. 9. 1-24.
- 中山誠二・中川真人・西願麻以(2018)シソ属果実を混 入した縄文土器―相模原市下原遺跡の事例―. 相模 原市立博物館研究報告 26, 16-34.
- 那須浩郎・会田 進・佐々木由香・中沢道彦・山田武文・ 興石 甫 (2015) 炭化種実資料からみた長野県諏訪 地方における縄文時代中期のマメの利用. 資源環境 と人類:明治大学黒曜石研究センター紀要, 5, 37-52.
- 大網信良・守屋 亮・佐々木由香・長佐古真也 (2018) 土器圧痕からみた縄文時代中期における多摩ニュー タウン遺跡群の植物利用と遺跡間関係 (第1報). 東 京都埋蔵文化財センター研究論集, XXXII, 1-25.
- 大川 清·大島秀俊(1975)勝坂遺跡 D 地点調査概報, 相模原市教育委員会
- 大山 柏(1927) 神奈川縣下新磯村字勝坂遺物包含地調 查報告, 史前研究会.
- 上野真由美・佐々木由香 (2018) 中井遺跡における縄文 中期の食用植物について―レプリカ法による土器種 実圧痕の同定―. 埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究 紀要, 32, 1-12.
- 丑野 毅・田川裕美(1991)レプリカ法による土器圧痕の観察.考古学と自然科学,24,13-36.
- 山本 華・佐々木由香・大網信良・亀田直美・黒沼保子 (2017) 東京都下野谷遺跡における縄文時代中期の植 物資源利用. 植生史研究, 26, 63-74.
- 山本 華・佐藤亮太・岩浪 陸・佐々木由香・森山 高・中野達也 (2018) 埼玉県犬塚遺跡の種実圧痕から見た縄文時代前期の利用植物. 古代, 142, 1-22.
- 米田恭子・バンダリ スダルシャン・佐々木由香 (2017) レプリカ法による土器種実圧痕の同定. 国指定史跡 川尻石器時代遺跡総括報告書, 121-125, 相模原市教 育委員会
- 米倉浩司・梶田 忠 (2003-) BG Plants 和名 学名イン デックス (YList), http://ylist.info